

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL.02021)

未来に向かう人類の英知を探る  
— 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか —

(科学・技術分野)

緒方洪庵に学ぶ  
～唯おのれを捨てて  
人を救わんことを希うべし～

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2018年6月28日開催の第60回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2019年春季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

## 未来に向かう人類の英知を探る

－ 時代の裂け目の中で、人々は何に希望を見出してきたか －

# 日本近代化の立役者たちを輩出した適塾 「緒方洪庵」の志

緒方洪庵（1810-1863）は幕末の大坂において蘭学塾である適塾を主宰した。20数年間に学んだ塾生は1,000人を数え、橋本左内、大村益次郎、福澤諭吉、長与専斎、佐野常民ら歴史に名を残す多くの人物を輩出した。洪庵は蘭学を通じてヨーロッパの最新医学を伝えるとともに、当時深刻な感染症であった天然痘の予防事業を関西一円で精力的に行って大きな成果を挙げた。これは幕府の認めるところとなり、奥医師そして西洋医学所頭取として召し出されたが、病を得て翌年に江戸で没した。

適塾での教育は、洪庵が直接教えるというより、オランダ語の原書を辞書を頼りに読み込んだ塾生同士が、議論して学び取るという形であった。切磋琢磨して合理的な考え方を身につけた塾生の中から、医学を超えて日本の近代化に貢献した人たちが育ったと思われる。講演では、社会の胎動期に生きた洪庵の生涯から見えるものを考えてみたい。

## 木下タロウ（Taroh KINOSHITA）

大阪大学微生物病研究所 藪本難病解明寄附研究部門教授  
東京大学農学部卒業（1974）、同大学院農学系研究科修士課程修了（1977）、大阪大学大学院医学研究科博士課程修了（1981）。医学博士。日本学術振興会奨励研究員（1981）、ニューヨーク大学博士研究員（1982）、大阪大学医学部細菌学助手（1982）、同講師（1988）を経て、大阪大学微生物病研究所教授（1990）。同研究所所長（2003）、同大学免疫学フロンティア研究センター副拠点長（2007）。2017年から現職。大阪科学賞（2001）、文部科学大臣表彰（2010）、IGO Award 2015、武田医学賞（2017）、日本免疫学会ヒト免疫研究賞（2017）、紫綬褒章（2018）受賞。生化学と免疫学の基礎研究のかたわら適塾の顕彰活動に携わってきた。



## 目次

はじめに

－ 緒方洪庵の生涯

### I 「適塾」の概要と人脈

#### (1) 「適塾」の概要

ア 最先端のサイエンスの学びの場

イ 開設場所 ー 当時の日本経済の中心地、大阪、淀屋橋界限

ウ 全国に広がっていた入塾者の出身地、その多様性

#### (2) 「適塾」の人脈 ー 主な門下生

ア 福澤諭吉

イ 長与専齋

ウ 大村益次郎

エ 佐野常民

オ 高松凌雲

### II 「適塾」の精神、洪庵の教え

#### (1) 科学的・合理的精神

ア 福澤諭吉『福翁自伝』に見る学びの姿勢

イ 長与専齋『松香私志』に見る会読の仕組み

ウ 蘭日辞書（ズーフ「ハルマ辞書」）を基に原書解読

#### (2) 医のこころ

ア 『医学必携』の翻訳

イ 「医師の心得 12 か条」（『扶氏医戒の略』）の伝授

#### (3) 適々のこころ

ア 「適塾」、二つの解釈

イ 福澤諭吉の「滴々の詩」

### III 洪庵の業績 ー 感染症との闘い

#### (1) コレラ治療指針の策定と普及

#### (2) 天然痘の予防に邁進

ア 日本中に蔓延した痘瘡

イ ワクチン入手に至る経緯

ウ 「除痘館」設立による種痘ネットワークの形成

#### IV 「適塾」から現代への贈り物

(1) 後世に伝えられる緒方洪庵と「適塾」の偉業

(2) 日本医学教育・研究の原点「適塾」

ア 大阪における医学教育の礎となった「適塾」

(ア) 大阪大学の精神的源流「適塾」

(イ) 医学教育病院（大阪仮病院）の前身「適塾」

(ウ) 大阪大学・東京大学医学部につながる「適塾」

イ 感染症研究の出発点となった「適塾」

(ア) 長与専斎による公衆衛生思想の普及と伝染病予防の社会実装

(イ) 北里柴三郎による伝染病研究所と東京帝国大学伝染病研究所の設立

(ウ) 大阪帝国大学・微生物病研究所と財団法人大阪微生物病研究会の設立

おわりに

— 洪庵の「こころ」。明治の近代化を支えた多くの人物を輩出

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 木下タロウからのメッセージ —

人生は一度。大切に、そして大胆に。

2018年6月28日開催

第60回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：日本近代化の立役者たちを輩出した適塾「緒方洪庵」の志

講演者：木下タロウ（大阪大学微生物病研究所 藪本難病解明寄附研究部門教授）

はじめに

#### － 緒方洪庵の生涯

緒方洪庵の生涯は、1810（文化7）年から1863（文久3）年までの53年間であった。明治維新、1868（明治元）年の5年前まで、幕末30年間を医師として教育者として活躍した。

洪庵は岡山の出身である。岡山駅から2、30分行ったところに足守駅がある。歴史に有名な備中高松城の水攻めがあった場所である。

洪庵の父、佐伯惟因<sup>1</sup>は足守藩の藩士で、洪庵はその三男としてここで生まれた。足守藩は木下藩ともいい、その藩主は寧々<sup>2</sup>の血筋の者であった。その藩士だった洪庵の父は、洪庵16歳の時に大坂<sup>3</sup>蔵屋敷<sup>4</sup>留守居役となった。洪庵はそれについて行き、しばらく大坂で暮らした。



緒方洪庵 肖像  
Public domain, via  
Wikimedia Commons

洪庵は、武家の三男として生まれ、家を継ぐことができない立場にあった。そこで、自分の将来を考え、武士の道ではなく医師になることを決意し、父母に手紙を書いて単身で大坂に出た。おそらく、一年前、大坂にしばらくいた時に、「大坂に行けば学問ができて、将来医師になれる」との思いを抱いていたと思われる。

洪庵は、17歳で大坂へ出て、有名な蘭学の先生、中天游<sup>5</sup>の塾に入る。そこで蘭学の教えを請いながら、中天游は医師でもあったので、医師の実地の勉強もすることができた。その後、江戸に出て有名な蘭学者、坪井信道<sup>6</sup>の塾に入り、その推薦で医師、宇田川榛齋<sup>7</sup>

<sup>1</sup> 佐伯惟因（1767-1847<明和4-弘化4>）

<sup>2</sup> 寧々（生年は諸説あり-1624<-寛永元年>）：豊臣秀吉の正室。

<sup>3</sup> 大坂：江戸時代には大阪を大坂と書いた。

<sup>4</sup> 蔵屋敷：江戸時代に大名（藩）が年貢米や領内の特産物を販売するために設置した倉庫兼邸第の事である。一般的に大阪にあったものが著名であるが、江戸・敦賀・大津・堺・長崎など、交通の要所である商業都市に設置される場合もある。

<sup>5</sup> 中天游（1783-1835<天明3-天保6>）：蘭学者。

<sup>6</sup> 坪井信道（1795-1848<寛政7-嘉永元年>）：江戸時代後期の蘭医。

<sup>7</sup> 宇田川榛齋（1769-1834<明和6-天保5>）：江戸後期の蘭医。

について医学の修業をした。そして、最終的には長崎で学んでいる。

当時、日本は鎖国をしており、長崎の出島だけがヨーロッパとつながっていた。出島にはオランダ商館があって、そこにオランダの医師が常駐していた。そこから日本人はヨーロッパの医学を学んでいた。当時の長崎は、ヨーロッパの新しい本や知識が入って来る場所だった。

このように、洪庵は大坂、江戸、長崎の3箇所で勉強し、28歳の時に大坂に戻って、医師として開業する。それと同時に、蘭学を教える「適塾」を開き、幕府に召されるまでの24年間、医師としていろいろと活動し、併せて多くの門下生を教育した。その中から明治維新、日本の近代化に大きな仕事をした人たちをたくさん輩出した。

その間、大坂での洪庵の医師としての力、学者としての力が幕府に評価され、最晩年52歳の時に奥医師<sup>8</sup>として江戸へ呼ばれる。同時に、幕府がヨーロッパの学問を教える学校として設立した西洋医学所<sup>9</sup>の頭取を兼任する。ただ、洪庵としては、実際は江戸へ行きたくなく、渋々行った。結局、一年で急死している。

## 1 「適塾」の概要と人脈

### (1) 「適塾」の概要

#### ア 最先端のサイエンスの学びの場

「適塾」は、1838（天保9）年に開塾した。その7年後に、現存する建物を洪庵が購入し、江戸に行くまでの20年近く、ここで医師をしつつ塾をして暮らした。この建物は戦災を免れて、今も大阪市内の淀屋橋の南東にある。

1階に洪庵の家族が住み、そこに診察室や教室があった。2階は畳の間になっており、塾生には1人1畳分が与えられ、彼らはここで寝起きしながら勉強した。塾生はかなりの割合で武士の子弟であった。若い人は血気盛んで、時には刀を振り回すこともあったようで、柱にはたくさんの刀傷が残っている。



適塾  
by Reggaeman, CC BY-SA 3.0  
via Wikimedia Commons

<sup>8</sup> 奥医師：江戸幕府の医官。若年寄の支配に属し、奥に住んでいる将軍とその家族の診療をした将軍家の医師である。

<sup>9</sup> 西洋医学所：江戸幕府が西洋医学を導入して教授させた医学校。安政5（1858）年5月7日、幕府の許可により伊東玄朴、大槻俊斎など江戸の蘭方医八十余名が協力してお玉ヶ池に種痘所を開き、種痘のほか、診療にも当たった。

この建物は東側も西側も空地になっていて、非常に良い環境で保存されており、史跡、重要文化財に指定されている。現在、大阪大学の管理下で一般に公開され、年間2万人ほどの見学者がある。

このように「適塾」は、洪庵が大坂に開設した蘭学塾であり、洪庵が江戸に迎えられるまでの24年間に千人以上の塾生を受け入れた。洪庵が江戸に行った後も、娘婿の緒方拙斎<sup>10</sup>が引き継いでしばらく塾を続けていたが、江戸末期に一旦閉じている。

「適塾」では、当時のヨーロッパの最新のサイエンスや医学をオランダ語で教えた。その結果、蘭学を身に付けた、いわゆる蘭方医を多く育てた。

#### イ 開設場所 一当時の日本経済の中心地、大阪、淀屋橋界限

「適塾」の場所を、明治維新の5年前に当たる1863（文久3）年の大坂の地図で見ると、中之島を挟んで大江橋と淀屋橋を通る現在の御堂筋、その淀屋橋の南東に今の「適塾」はある。初代の「適塾」はもっと南にあったと思われるが、資料が残っていないので詳細は分からない。



改正増補 国宝大阪全図 文久3年版

洪庵の大きな業績の一つは天然痘のワクチン事業である。それを行った最初の施設である初代「除痘館」は、現在、製薬会社の本社が建ち並ぶ道修町の通り沿いにあった。その後、2代目の「除痘館」は「適塾」のすぐ南側に移り、今もその跡がある。

また、中之島界限は各藩の藩邸が並んでいたところで、各藩から船で運ばれて来た米はこの藩邸の米蔵に置かれていた。昔、中之島にあった大阪大学の医学部の敷地は、広島藩の藩邸跡であった。隣は久留米藩。リーガロイヤルホテルは高松藩の藩邸跡に建っている。このように川沿いに藩邸が並んでいた。その中の一つに大分の中津藩の藩邸があった。「適塾」の門下生の筆頭であった福澤諭吉は、父が中津藩の藩士で、大坂詰めであったことから、この藩邸の中の長屋で生まれている。

洪庵の故郷である足守の足守藩の藩邸は中之島の西の端にあったことから、洪庵も16歳の時にしばらくそこにいたことがある。

そのように各藩の藩邸があり、経済の中心でもあり、道修町で薬も手に入るという場所

<sup>10</sup> 緒方拙斎（1834-1911<天保5-明治44>）：漢学を広瀬淡窓に、蘭学を青木周弼（しゅうすけ）、緒方洪庵に学ぶ。後、洪庵の養子となり適々斎塾を継ぐ。



に「適塾」はあった。

#### ウ 全国に広がっていた入塾者の出身地、その多様性

「適塾」では、全国各地から集まった千人以上の塾生が学んだと言われている。1844（天保 15／弘化元）年から 20 年間にわたる入門者の自署による姓名録には、「安政三年三月九日入門 中津藩 福澤諭吉」と福澤の自署も残っている。ここには 637 名の署名がある。署名をしていない人も含めると千人を超えるだろうと言われている。

塾生は全国から来ていたが、主に西日本から来た人が多く、大坂近辺はもとより、中国地方、九州、四国から来た人も多かった。また、北陸の福井、金沢辺りからも来ており、静岡や江戸からも来ていた。さらに、新潟、山形、松前藩からも来ていた。塾生が出ていないのは青森県と沖縄県だけであった。そのことから、「適塾」が江戸時代には相当に有名であったことが分かる。

#### (2) 「適塾」の人脈 一 主な門下生

主な門下生の中、医師や医学者として活躍した歴史上の有名人は少ないが、高松凌雲や長与専齋などは医学の中では名の知れた人である。

医学の分野を超えると、明治維新において日本の近代化に貢献した人として、大村益次郎、佐野常民、橋本左内、大鳥圭介、福澤諭吉などの名前が挙がる。中でも有名な門下生は福澤諭吉と長与専齋で、この 2 人はほぼ同時代を生きている。

#### ア 福澤諭吉 (1835-1901<天保 5 - 明治 34>)

福澤諭吉は、教育者でありオピニオンリーダーであり、慶應義塾を創立した人である。明治時代に種々の近代的なシステムを日本に紹介し、その様々なテクニカルタームを日本語に置き換えるなどの偉業をなしている。

福澤諭吉が生まれた場所は、元大阪大学の附属病院のあった所で、川沿いのその場所には、「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ 人ノ下ニ人ヲ造ラズ」という有名な言葉が刻まれた碑が建っている。この碑は慶應義塾大学の人たちが造ったもので、「幕末明治の大教育家 福澤諭吉先生ここに生まる」と記されている。福澤諭吉は生まれた時に大きな子だったので、親は良い子になるだろうと語ったと伝えられるも、「この子が後年、西洋文明東道の主人となり、封建的観念形態の打破に努力するに至る将来を誰が予見し得たであろうか」と結んである。



福澤諭吉  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

#### イ 長与専齋 (1838-1902<天保 9-明治 35>)

長与専齋は、内務省の初代衛生局長として活躍した人である。当時、日本には「衛生」という概念がなかった。長与はヨーロッパ視察の際に、ドイツでその言葉を聞く。日本に帰ると、衛生局長となり、公衆衛生システムを確立した。

さらに、医師の国家試験による医師免許制度も確立している。また、薬局法を整備するなど、日本の医療システムに大きな貢献をした。



長与専齋  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

#### ウ 大村益次郎 (1824-1869<文政 7-明治 2>)

大村益次郎は、長州の出身である。医学の勉強をしたが、それに加えて兵学を学び、ヨーロッパの軍隊にならって近代軍隊をつくった。長州藩はその近代軍隊を持つことによって、幕府軍に勝ち、明治維新を導いた。



大村益次郎  
Public domain, via Wikimedia Commons

#### エ 佐野常民 (1823-1902<文政 5-明治 35>)

佐野常民は、明治新政府の海軍を創設した人である。また、西南戦争に医師として参加し、博愛社を設立して西南戦争での傷病兵を治療した。その後、明治 20 年に日本赤十字社が設立され、その初代社長となっている。



佐野常民  
Public domain, via Wikimedia Commons

#### オ 高松凌雲 (1837-1916<天保 7-大正 5>)

大村益次郎と佐野常民が討幕側であるのに対して、高松凌雲は佐幕側の人物である。一橋慶喜の侍医で幕府の奥医師となり、戊辰戦争の際に幕府側の医師として行くが、箱館野戦病院で敵味方の別なく手当てをするなど、博愛精神を発揮している。

その後、明治政府には参加せず、東京で慈善的な医師としての活動を続けている。

その他、福井の人で、進取的な開国論を唱え、安政の大獄で亡くなった橋本左内 (1834-1859<天保 5-安政 6>)、幕府方で箱館戦争に参加したが、その後、許されて外交官として活躍した大鳥圭介 (1833-1911<天保 4-明治 44>)、佐野常民の後の日本赤十字社の社長を務めた外交



高松凌雲  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

官出身の花房義質（1842-1917<天保 13-大正 6>）など、博愛精神を持った人が「適塾」から出ている。このことが一つの特徴である。

また、東京大学医学部や大阪大学医学部の創設に当たっては、「適塾」の出身者が最初から中心的な役割を担っており、池田謙斎（1841-1918<天保 12-大正 7>）は東京大学医学部の初代総理であり、洪庵の息子の緒方惟準（1843-1909<天保 14-明治 42>）は、明治の初めにできた大阪大学医学部の前身の学校の校長を務めている。

## II 適塾の精神、洪庵の教え

「適塾」は多くの優れた人材を輩出してきたが、そこには三つの精神が流れている。「科学的・合理的精神」と「医のこころ」、そして「適々のこころ」である。

### （1）科学的・合理的精神

科学的・合理的精神の習得が、その後に活躍した人を多く輩出した要因である。当時の日本には東洋的な考え方が広く行き渡っていた。その中であって、医学などに関することをオランダ語の原書で勉強するのが「適塾」の原則であった。翻訳した本を読むのではなく、自分たちで原書を読む。それによって、ヨーロッパの科学的、合理的な内容を自ら掴んだことが非常に大きな意味を持っていた。

#### ア 福澤諭吉『福翁自伝』に見る学びの姿勢

福澤諭吉の『福翁自伝』には、「西洋日進の書を読むことは、日本国中の人にできないこと。自分たちの仲間に限ってこんなことができる。貧乏をしても、難渋をしても、粗衣粗食、一見見る影もない貧書生でありながら、智力思想の活発高尚なることは王侯貴人も眼下に見下すという気位で、ただ難しければ面白い。」と書かれており、難しければ面白いという勉強の仕方をしてきた。

#### イ 長与専斎『松香私志』に見る「会読」の仕組み

「どのような教育をしていたのか」「どこにこのような人材を輩出するヒントがあるのか」は、よく議論になる。長与専斎が自伝『松香私志』の中で、「適塾」においては、会読により塾生相互の教育が行われていたと書いている。

これは、塾生 10 人ほどを 8 級に分けて、各級を塾頭、塾監、一級生などの上級者が指導する。そのような会が月に 6 回開催されていた。その際、オランダ語の原本を読む部分が各人に割り当てられていて、その担当部分を予め訳しておいて説明する。それに対して、次席の者が質問し、その質疑の内容でどちらが勝ったかを決め、勝った方には点数が付く。その点数を月ごとに集計し、得点順に席順を決める。3 箇月上席を占めると進級する。

そして、席順に応じて、2階の塾生部屋の場所を選ぶ。例えば、壁の傍は良い場所だが、階段の傍の皆の通り道に当たる場所は良くないので、良い場所を取れるように皆、切磋琢磨して頑張った。

#### ウ 蘭日辞書（ズーフ<sup>11</sup>「ハルマ辞書」）を基に原書解読

蘭日辞書を頼りに皆が原書を翻訳し、やり取りを通じて学び取る作業を行っていた。「適塾」ではこの辞書一式を置いてある部屋を「ズーフ部屋」と呼んでいた。そこは一晚中蠟燭の火が消えることがなく、この辞書を取り合うようにして皆が勉強をした。

この辞書は、かなり前に作られた蘭仏辞書(ハルマ辞書)という「オランダ語 - フランス語」の辞書を基に、長崎のオランダ商館の医師ズーフが、オランダ語に日本語を当て、長崎にあったオランダ語の通訳をする日本人コミュニティの人たちが手伝って蘭日辞書を完成させたものである。

このような勉強の過程で、蘭学の知識だけではなく、合理的な考え方も掴んでいった。



1833年に出版され、適塾で使用された蘭日辞書（ズーフハルマ辞書）。塾生達は、長崎に輸入されたオランダ語の原書を読み、ヨーロッパの医学、化学、技術を学んだ。  
所蔵：大阪大学附属図書館

### （2）医のこころ

#### ア 『医学必携』の翻訳

洪庵は医師としての“こころ”をととても大事にし、塾生に伝えている。

洪庵が行った大きな仕事の一つとして、ベルリン大学のフーフェランド<sup>12</sup>教授が書いた内科全書『医学必携』のオランダ語訳を日本語に訳したことが挙げられる。それは『扶氏経験遺訓』と名付けられた。この「扶氏」とはフーフェランドのことである。このフーフェランドの『医学必携』を訳した30巻からなる『扶氏経験遺訓』は、洪庵の翻訳の第一のものである。

#### イ 「医師の心得12か条」（『扶氏医戒の略』）の伝授

<sup>11</sup> ズーフ（1777-1835）：1817（文化14）年の離日まで長崎出島で商館長をつとめ、長崎の通詞を指導して蘭日辞書「ズーフ-ハルマ（長崎ハルマ）」を編集した。

<sup>12</sup> フーフェランド（Christoph Wilhelm Hufeland, 1762—1836）：50年間の臨床医としての経験をもとにして『医学必携』Enchiridion Medicum（1836）を出版した。この本の一部は日本の幕末の緒方洪庵により『扶氏経験遺訓』、杉田成卿（せいけい）により『済生三方（さいせいさんぼう）付医戒』、青木浩斎（こうさい）（伊王野坦（いおうのひろし）、1814—1883）により『察病亀鑑（きかん）』として翻訳刊行された。

『医学必携』の最後にフーフランドは「医師の心得 12 か条」を書いており、洪庵はそれに感動し、そこに自分の考えを重ねて『扶氏医戒の略』として訳している。そして、これを医師のあり方を示す指針として、弟子たちに伝えた。

「医師の心得 12 か条」（『扶氏医戒の略』）は、第 1 条は「医の世に生活するは人の為のみ己がためにあらずということを其業の本旨とす 安逸を思はず 名利を顧みず唯おのれをすてて人を救わんことを希ふべし 人の生命を保全し 人の疾病を復治し 人の患苦を寛解するの外他事あるものにあらず」となっている。第 2 条は「病者に対しては唯病者を見るべし 貴賤貧富を顧みることなかれ ……」。

以下 12 条まで続く。これが「医のこころ」であり、これを洪庵はとても大事にして、弟子たちに伝えた。

ところで、この最後にある『扶氏医戒の略』は、洪庵が自筆で書いた巻物として緒方家に伝えられていた。その現物が先年、大阪大学に寄贈された。それを見ると、一旦書いた上からまた朱書きで添削して仕上げているのが分かる。洪庵はただ翻訳するだけではなく、そこに自分の医師としての考えを重ね、自分のものとして心得を書いたことが分かる。

### （3）適々のこころ

「適塾」の精神は、「適々のこころ」のことである。緒方洪庵は自分のことを「適々齋」と呼んでおり、「適々齋」の塾なので「適々塾」と称し、それが「適塾」となった。

#### ア 「適塾」、二つの解釈

適塾の解釈には二つある。一つは「自分の心に適するものを適として愉しむ」という解釈で、中国の『莊子』の太宗師篇に「適適」という言葉があり、その文脈からの解釈である。洪庵は、医師で学者であったが、いわゆる堅物ではなく、いろいろな愉しみを持っていた人だった。その中の一つが和歌を詠むことで、生涯にたくさんの和歌を詠んでいる。それらの和歌は「春の巻」「夏の巻」「恋の巻」などと整理されている。そういう「自分の心に適するものを適として愉しむ」という側面を表す言葉だというのが一つの解釈である。

もう一つは、自分の人生で追求すべきもの、つまり職業について、「自分の心に適った事を自らに適した道として追求すべき」という意味があるのではないかとの解釈である。この原典とされる『老子』も中国にあり、日本に紹介されているものであるが、どちらが正しいかは定かではない。

#### イ 福澤諭吉の「滴々の詩」

福澤諭吉は、自分の師がどのような心から自らを「適々齋」と呼んだのかを考え、『滴々の詩』を書いている。「滴々豈唯風月耳 渺茫塵界自天真 世情休說不如意 無意人乃如意人」（滴々にあに唯風月のみならんや 渺茫たる塵界自ら天真 世情説くをやめよ 意の如

くならずと 無意の人は乃ち如意の人)という漢詩で、「洪庵先生の言う適適とは、花鳥風月を愉しむという、自分の適ったことを適として愉しむことだけではない」と言っている。

「渺茫<sup>びようぼう</sup>たる塵界」とは人の世のことであり、世の中は自ずから「天真」すなわち天の摂理によって動いているのであるから、とやかく言っても自分の思うとおりににはならないということ、そして「無意」でいる人が実際は「如意の人」であること、つまり、自らの心に適ったことを追求して人生を過ごせば、それが「如意の人」であると言っている。つまり、「適々のところ」とは、自分の人生をどのように捉えるかということと言っているのではないかとの捉え方である。

このように「適塾」の精神は、「科学的・合理的精神」「医のこころ」「適々のこころ」である。門下生たちは、この精神を深く学びながら、日夜、勉学に励んだ。

### III 洪庵の業績 一感染症との闘い

医師としての緒方洪庵の業績については、二つの大事な仕事を挙げることができる。当時の病気の最たるものは感染症であった。今のガンや生活習慣病に相当するような病だ。その一つはコレラで、外国から入り込んだ病気である。安政時代に日本でコレラの大流行が起きている。これは長崎に来航したアメリカ船の乗組員が罹患していたことから、長崎にコレラが入り、大坂から江戸まで広がった。江戸だけで10~20万人が亡くなったと言われている。

#### (1) コレラ治療指針の策定と普及

コレラの流行が始まった時に、洪庵は、ヨーロッパで発刊された3著書からコレラの治療法に関する部分を急いで翻訳し、『虎狼痢<sup>ころうりちじゅん</sup>治準』というコレラの標準的治療法を本にまとめ、100部作って医師仲間に配布した。「緒方洪庵譯述」「適適齋蔵」「百部絶版不許売買」と書かれている。これを受け取った医師たちは、これを参考にしてコレラの治療に当たった。もちろん、当時は、ヨーロッパでもこのコレラの治療法がそれほど効果を上げたとは思えないが、そういう一大事が起きた時に急いで動く。洪庵はそういう人だった。

#### (2) 天然痘の予防に邁進

もう一つの感染症は天然痘だった。これは最も恐ろしい病気で、日本国内に長らくあったものである。

#### ア 日本中に蔓延<sup>とうそう</sup>した痘瘡

江戸時代は天然痘のことを痘瘡と呼んでいたが、非常に恐ろしい病気で、誰でも罹る恐れがあった。江戸時代の15代までの将軍のうちで6人が罹った記録があり、天皇も14人中5人が罹っている。

また、1857（安政4）年に長崎の商館に来たオランダ人医師ポンペ<sup>13</sup>が書いた『日本滞  
在見聞記』には「世界中で日本ほど痘瘡の痕跡のある人の多いのは見たことがない。おそ  
らく全人口の3分の1は顔に痘痕を持っているであろう。」の記述がある。天然痘に罹る  
と発疹が出る。その中にウィルスがいて、治った跡が痘痕になる。その痘痕によって天然  
痘に罹って治ったことが分かる。それほど江戸時代には罹る人の多い恐ろしい病気だっ  
た。

## イ ワクチン入手に至る経緯

天然痘は治療をしなければ致死率10～20%の病気である。幕末よりかなり前にイギリス  
のジェンナー<sup>14</sup>がワクチンを発明していた。これは牛に同じような病気があって、その牛  
の病気（牛痘）に人が罹ると抵抗性ができて人が天然痘に罹らないことが分かっていた。  
そのことから、牛痘のウィルスをワクチンとして接種して、天然痘を予防するというもの  
であった。

洪庵たちも書物からその知識を得ていたが、そのワクチンはなかなか日本に届かなかっ  
た。そのワクチンは生きたウィルスを接種するいわゆる生ワクチンで、ウィルスを生きた  
状態のまま日本に届けなければならなかったが、その方法が難しかった。ウィルスがよう  
やく長崎に届いたのは、ジェンナーの発明から50年経った後だった。最終的に、患者の  
かさぶたを瓶に入れて、ウィルスが生きた状態のまま日本に持ってきたものを、長崎で子  
どもに接種したところ上手くいった。50年かけて日本に来たワクチンは、その4箇月後、  
洪庵の手に入った。

## ウ 「除痘館」の設立による種痘ネットワークの形成

牛痘のワクチン株を手に入れた洪庵は、大坂で大規模な種痘事業を展開して成功した。  
牛痘の生ワクチンは子どもから子どもに植え継いでいくほかなかったため、すぐに失敗し  
て途切れ、ウィルスが絶えてしまう恐れがあった。洪庵はそれを防ぐために、各所にワク  
チン株を分苗し、種痘所のネットワークを作って、ある所で株が絶えても、別のところか  
ら持って来られるようにして、ネットワークで維持することに成功した。

また、牛から取ったものを接種することが信用されない状況も一時期あり、風評が流れ  
て、そのような接種を誰も受けなくなったこともあった。そのため、洪庵はチラシ等で啓  
発活動を行い、また信用を得て接種をできるようにした。

非常に苦労したが、洪庵はシステマティックに展開して成功し、大阪府だけでも60箇

---

<sup>13</sup> ポンペ（Johannes Lijdius Catharinus Pompe van Meerdervoort, 1829 - 1908）：幕末に来日し、オラン  
ダ医学を伝えた。日本で初めて基礎的な科目から医学を教え、現在の長崎大学医学部のもとになる西洋式  
病院である長崎養生所も作った。

<sup>14</sup> エドワード・ジェンナー（Edward Jenner, 1749 - 1823）：イギリスの医学者。牛痘接種法を開発した。  
近代免疫学の父とも呼ばれる。

所、兵庫県も同じくらいの数を分苗し、ネットワークを作って大規模に展開した。

洪庵は自筆で大坂の『除痘館記録』を書いている。洪庵の「医のころ」は「医師の心得 12 か条」だけではなく、ここにも表れている。「除痘館」は最初から「これは医の道のため、新しいやり方を世の中に広めるために行う。そこから利益を得ても、自分の利益にしないで、さらに活動を広げるために使う」という誓いを立ててスタートしたと書かれている。ここにも洪庵の考え方が反映されている。すべて「世のため、人のため」というのが洪庵の口癖だった。

ところで、手塚治虫の作品『陽だまりの樹』に、洪庵の種痘の様子を描いた場面がある。そこには子どもの腕にウィルスを接種すると、そこでウィルスが増えて、膿が出てかさぶたができる。それが治ったら天然痘に対する免疫ができています。

実は、手塚治虫の曾祖父の手塚良仙は、福澤諭吉と同じ時期に「適塾」で学んだ人であり、その人の一生を描いたのが『陽だまりの樹』である。作品の中に、洪庵が種痘をしている様子が描かれている。

## V 「適塾」から現代への贈り物

### (1) 後世に伝えられる緒方洪庵と「適塾」の偉業

司馬遼太郎は、緒方洪庵と「適塾」を高く評価し、子ども向けに『洪庵のたいまつ』という文を書いている。

「世のためにつくした人の一生ほど、美しいものはない。

ここでは、とくに美しい生涯を送った人について語りたい。

緒方洪庵のことである。

この人は、江戸末期に生まれた。

医者であった。

かれは、名を求めず、利を求めなかった。

あふれるほどの実力がありながら、しかも他人のために生き続けた。そういう生涯は、ふり返ってみると、実に美しく思えるのである。

(略)

日本の近代が大きな劇場とすれば、明治はそのはなやかなまく開けだった。その前の江戸末期は、はいゆうたちのけいこの期間だったといえる。適塾は、日本の近代のためのけいこ場の一つになったのである。

すばらしい学校だった。(以下、略)」



## (2) 日本医学教育・研究の原点「適塾」

### ア 大阪における医学教育の礎となった「適塾」

#### (ア) 大阪大学の精神的源流「適塾」

大村益次郎を主人公にした小説『花神』（司馬遼太郎）の冒頭に「浪華の塾」という題の文章がある。

「適塾という、むかし大坂の北船場にあった蘭医学の私塾が、因縁からいえば国立大阪大学の前身ということになっている。宗教にとって教祖が必要であるように、私学にとってもすぐれた校祖があるほうがのぞましいという説があるが、その点で、大阪大学は政府がつくった大学ながら、私学だけがもちうる校祖をもっているという、いわば奇妙な因縁をせおっている。」

司馬遼太郎がこのように書いたことがきっかけとなって、「適塾」が大阪大学の精神的源流に位置づけられている。組織的にそのまま繋がっているわけではないが、あくまでも精神的源流として位置付けられている。

#### (イ) 医学教育病院（大阪仮病院）の前身「適塾」

洪庵が亡くなった後、1869（明治2）年に明治新政府は大阪に大学を設立することとした。その一つの重要な部分となり、医学校の基となる大阪仮病院を、ある寺を借りてつくった。後、大阪大学医学部となる医学教育病院である。

オランダ人教師ボードウィン<sup>15</sup>を雇い、洪庵の息子の惟準が校長を務めた。「適塾」の最後の頃を中心メンバーがそのまま大阪仮病院の中心メンバーとなった。「適塾」がこの病院になった。「適塾」の学問が基になって大阪大学医学部の前身が1869（明治2）年にスタートした。

#### (ウ) 大阪大学・東京大学医学部につながる「適塾」

<大阪大学>

「適塾」の建物は洪庵が江戸に行った後もしばらくは塾として利用されていたが、戦前、1917（昭和17）年に大阪帝国大学へ寄付され、そのまま大阪大学が管理し、現在に至っている。

種痘の施設である「除痘館」は、非常に成功したので、幕府がそれを認めて「種痘公館」という公の施設とした。これは、1864（明治2）年に大阪大学の前身の学校、医学教育病院（大阪仮病院）ができた後に、附属の施設になっている。そういう意味では、「除痘館」を大阪大学の組織の一部と位置づけることもできる。

---

<sup>15</sup> アントニウス・フランシスクス・ボードウィン（Anthonius Franciscus Bauduin, 1820 - 1885）：オランダ出身の軍医。1862（文久2）年長崎養生所教官として来日。江戸に医学校創設の準備のため帰国後再来日し、1869（明治2）年大阪仮病院に勤務、大学東校でも教えた。

医学校として続いていた医学教育病院（大阪仮病院）は幾多の変遷を経て大阪府立医科大学となり、1931（昭和6）年に大阪帝国大学になる。1934（昭和9）年には微生物病研究所がその中に設立される。このように見ていくと、洪庵の学問が大阪大学医学部に繋がっていることがよく分かる。

#### <東京大学>

東京大学の医学部は「お玉ヶ池種痘所」が始まりである。これは神田辺りにあったものが基になって西洋医学所ができ、医学校になり、東京大学医学部になった。洪庵が最初の西洋医学所頭取となったこともあり、「適塾」の門下生が教授となった。後に東京大学医学部になると、門下生の池田謙齋が初代総理、長与専齋が副総理となった。

### イ 感染症研究の出発点となった「適塾」

#### （ア）長与専齋による公衆衛生思想の普及と伝染病予防の社会実装

「適塾」から江戸（東京）を経て大阪につながる感染症の研究の流れがある。洪庵にとっては、コレラ治療指針の策定・普及と「除痘館」のワクチン事業が医師としての大きな業績である。門下生の中に福澤諭吉と同年代の長与専齋がいるが、長与は内務省の初代衛生局長として活躍している。

明治になると、牛の皮膚を使って大量に安定的にワクチンを作る技術が日本に伝わる。長与は牛痘ワクチンの安定供給体制を作る。公衆衛生についても取り組み、伝染病対策として港で検疫を行うなど、伝染病対策を社会に実装した。

#### （イ）北里柴三郎による伝染病研究所と東京帝国大学伝染病研究所の設立

北里柴三郎<sup>16</sup>も、長与専齋の口利きでドイツに留学し、ドイツのコッホのところで大きな業績を上げて帰国する。彼に対して当時の明治政府は適切な研究環境を準備できなかった。それを見て長与専齋は、福澤諭吉に協力を求めた。福澤諭吉は私財を提供し、土地と建物に加えて当時の慶應義塾の事務の人も派遣し、北里のために伝染病研究所を設立した。北里の活躍により、伝染病研究所は発展して日本の医学研究の中心になっていく。その後、当研究所は、東京帝国大学の伝染病研究所になり、今、東京大学の医科学研究所になっている。

#### （ウ）大阪帝国大学・微生物病研究所と財団法人大阪微生物病研究会の設立

昭和の初め、長与専齋の三男の長与又<sup>またお</sup>郎が伝染病研究所の所長となった。医科学研究所の講堂にその胸像がある。この長与又郎自身もツツガムシ病という伝染病を研究し、伝染病研究所所長を務め、後に東大総長になった。この長与又郎が大阪府立医科大学細菌学教

---

<sup>16</sup> 北里柴三郎（1853 - 1931<嘉永5- 昭和6>）：日本における近代医学の父として知られ、伝染病予防や細菌学の発展に大きく貢献した。

授として大阪に送った谷口腆二<sup>てんじ</sup><sup>17</sup>が、1929（昭和4）年に、大阪にも伝染病研究所が必要としてその設立を構想した。それから数年を経た1934（昭和9）年、大阪帝国大学に微生物病研究所がつくられた。

谷口腆二は微生物病研究所をつくると同時に、財団法人阪大微生物病研究会を設立した。インフルエンザのワクチンや麻疹<sup>はしか</sup>のワクチンなどのニュースで広く知られている「ビケンワクチン」があるが、この微研は、1934年（昭和9年）に財団法人として谷口腆二がつくった組織である。当初は大阪の豊中でワクチンを作っていたが、戦後、香川県観音寺市に移った。2011年（平成23年）に観音寺市に瀬戸センターがつくられた。日本のワクチンメーカーの一つで、日本のワクチンの3分の1から4分の1を供給する大きな組織となっている。これは大学発ベンチャーの走りと言えるものであり、80数年を経てこのように発展している。洪庵以来のいろいろな感染症の研究や学問が大阪に根付いていることの証左である。

## VI おわりに

### 一 洪庵の「こころ」。明治の近代化を支えた多くの人物を輩出

洪庵の志はやはり「こころ」である。『扶氏医戒の略』に医師の心得を自分の信条として整理し、『除痘館記録』にも「是唯仁術を旨とするのみ世上の為に新法を弘むることなれば」と書いて、自分の利益にしないことを申し合わせている。

また、洪庵は「臨事無為賤丈夫」（事に臨んで賤丈夫となるなかれ）を座右の銘として、事をする時に心賤しい行いをするな、正々堂々とやれという言葉を常に弟子たちに授けている。それが門下生のベースになり、そこにヨーロッパの合理的な考え方が重なって、大きな仕事をした人たちが輩出された。

ところで、洪庵は52歳で幕府に呼ばれて江戸に行く。その際、50歳の時の自分の肖像をもう一度描き写してもらい、そこに和歌を添えて、一つを「適塾」、もう一つを「除痘館」に残している。

洪庵は武士なので、刀を背にして座っている姿が肖像画となっている。そこに「おほやけのおほせをうけて 戌の八月いつかの日 あづまに下るとて 旅たち侍るによみて遣しける」（幕府に呼ばれて東へ下るにあたって和歌を詠む）と記し、また、「よるへとそとおもひしものをなにはかたあしのかりねと なりにけるかな」（自分は大坂で一生涯を終えたかったのに、呼ばれて仕方なく江戸へ行くことになってしまった）と嫌々ながら江戸へ行く心情を詠んでいる。

---

<sup>17</sup> 谷口腆二（1889-1961<明治22-昭和36>）：大正-昭和時代の細菌学者。医学部長、微生物病研究所長を務める。

江戸では、「江戸の生活は非常に窮屈で、大坂が良かった」と日記にも手紙にも書いており、一年で亡くなっている。

もう一つ、「除痘館」の方に残された肖像画には「としことに おひそうのへのこまつ原ちよにしけれと うゑもかさねむ」（一年一年松が大きくなっていくのと同じように、千代に繁れと思いながら種痘を植え続けてきた）と、洪庵の気持ちが表れる和歌が書かれている。

こうした緒方洪庵の「こころ」は、その創設した「適塾」の礎となり、明治の近代化を支える多くの人物を輩出した。

## 質疑応答

- Q 1 門下生が戊辰戦争で両軍に分かれたのはなぜか
- Q 2 「適塾」はなぜ時代を動かす人材を輩出し得たのか
- Q 3 医師になるためにどのような教育をしていたのか
- Q 4 大阪大学で「医のこころ」を継承するための取組はあるのか
- Q 5 江戸時代の医師はどのような身分だったのか
- Q 6 福澤諭吉の独立自尊の志は「適塾」で生まれたのか

### Q 1 門下生が戊辰戦争で両軍に分かれたのはなぜか

戊辰戦争では「適塾」から両軍に優秀な人材が出ているが、その点はどのように解釈したらよいのか。

(木下)

門下生は討幕側と幕府側の両方に参画しているが、それは、長州出身の人が討幕派になるというように、個人が元いた藩の状況に依るところが大きいと思う。しかし、同じ塾で学び、互によく理解している者同士なので、例えば、箱館の戦いで幕府側にいて負けた人も、相手の大将が適塾出身者という関係があったのか、許されて、その後、明治新政府に貢献した人もいる。やはり、適塾を通じた人間関係は、その後の門下生の運命を決めることになった。

洪庵がどのような政治的思想を持っていたかは明らかではないが、幕藩体制が崩れていく時期に、大坂の真ん中で医師をして、さらに塾で人を教えていたことから、いろいろな世の中の情報も入るし、塾生の中には藩の状況によって志士的な思想の持ち主もいたし、そういう人たちを指導していくのはかなり難しい面もあったのではないかと想像する。ただし、洪庵自身が政治的にどのような立ち位置で門下生と接していたかは分からない。

一方で、黒船来航に影響を受けて、日本が諸外国に対応して生きていくためには、外国のことを理解できる人を育てることが絶対に必要だと考えたようで、「医師の往診を止めて、塾生の教育に専心している」と門下生に書いた手紙が残っている。したがって、洪庵は、世の中の動きに反応して自分の生活の有り様を変えることはあったようである。

### Q 2 「適塾」はなぜ時代を動かす人材を輩出し得たのか

混迷の時代という点では現代と近い部分もあるような気がするが、「適塾」と大学を照らし合わせた時に、リーダーシップをとるという意味で、他にも私塾があった中で、洪庵の下に多くの人が集まり、なおかつ、時代を動かす人たちが輩出され得た決定的な要因は何だったのか。洪庵のパーソナリティも含めて教えていただきたい。

(木下)

それは大阪大学に所属する者全員が知りたいことであり、「どのような学校にすれば、そういう人材が輩出されるのか」というテーマは時々議論になるが、答えは出ない。

当時は、幕藩体制が崩れていくことが見えていて、その先がどうなっていくかが見えないという、皆が不安を持つような世の中だったと思う。そこで、日本では知られていなかった知識がヨーロッパにあったので、勉強によってその知識を得ることによって、世の中のためになる仕事をするような人たちがあの塾から出てきたわけである。しかし、どのようにして彼らが輩出されたのかは、教育に携わる者の本質的な問題である。

私はそれを「こころ」としてまとめることしかできていないが、洪庵のパーソナリティについては、穏やかな人だったと言われており、大声を出して怒るようなことが一切ない人だったと、論吉なども書いている。洪庵が直接指導をしたのは塾頭や塾監などの本当に上級の人だけだったようだが、福澤論吉は「先生の話をお聴くと、自分たちの理解がどれだけ浅かったかを思い知らされる」とも書いており、そのような洪庵の物事の本質を理解する力を弟子たちは理解していたので、尊敬する雰囲気があったと思う。その洪庵が「医のこころ」等の心の大事さや、世のため人のために人生を使うということを常に話し、それだけではなく、塾生が去る時には色紙に書いて渡したり、手紙に書いたりしていたので、塾を出た後も門下生たちは洪庵の考え方に触れて伸びていったのではないかと感じる。

教育の方法は、あくまで塾生たち同士で切磋琢磨して学び取るという形であり、今の大学は一方的な教育になっているので、そこが根本的に間違っているのではないか。

### Q3 医師になるためにどのような教育をしていたのか

医師になることが「適塾」の目的の大きな柱だったと思うが、臨床教育はどのようにしていたのか。具体的に一人の若者が入塾して、どのくらいの期間をかけて一人前の医師と言えるようにしていたのか。

(木下)

洪庵自身は17歳～28歳まで12年間医学の修業をしているが、その中で、中天游や江戸の宇田川榛斎などの蘭方医の所に住み込んで、先生がすることを学び取るという実地教育を10年くらい行って、大坂で医師として開業するという過程を経ている。

一方、「適塾」の塾生の滞塾期間はそれほど長くなくて、1～3年くらい、長くても4～5年だと思うが、座学だけで医師になれるはずは絶対はないので、どのように医学の実地教育を行っていたのか、あるいは、全くされていなかったのかは謎として残る。

ただ、大坂でも海に近い方に犯罪者の腑分けをする場所があったので、そういう所に塾生がグループで出掛けて行って見学をするなどのことは行っていたようである。

また、洪庵が医師として往診に行く時や、塾で診察をしている場面に立ち会うなどのこともあったと思う。ただ、それを明確に記録した文献はない。

いずれにしても、基本は見よう見まねで学び、薬の使い方も先生から伝えられる中で、

経験で学習していくような世界だったと思われる。

#### Q4 大阪大学で「医のこころ」を継承するための取組はあるのか

大阪大学は洪庵の「医のこころ」を伝統的に継承していくことに気を使っていると思うが、具体的に教育現場でどのような工夫をしているのか。独自の取組はあるのか。

(木下)

医学部の学生にどのような教育をしているかは直接関与していないが、昔の医学部の学生は、かなりの割合で親や親戚が医師であったために「医師の職業とはどういうものか」ということを小さい頃から知っていた。あるいは、友だちの中にそういう医師の子どもがいて、友だちを通じて「医師とはどうあるべきか」ということを理解した上で医学部に入って来る学生が多かった。そして、学生間のいろいろな付き合いの中で、自然に医師という職業がいかに社会の中で責任があり、リスペクトされるかということ、ある程度は認識していたので、教師の方から「医師の職業とはどういうものか」ということを教育しなくてもよかったようである。

ところが、段々と医学部は高い点数を取れる学生が入って来る学部という位置づけになり、自分たちが育った17～18年の間に「医師とはどういうものか」ということに触れずに、ゼロの状態が入って来る学生が増えてきた。そういう学生に「医師とはどのようにあるべき職業か」ということを教えるのは難しい。これが現実に行き始めているようである。フレッシュな間にそういう知識を入れていくことが大事だが、大阪大学であつてもなかなか上手くいっているとは言えないと思う。

ただ、幸いにも、大阪大学は「適塾」を持っているので、新入生を「適塾」に連れて行って、緒方洪庵について話すなど、そういうことはできる。それは何もしないよりは随分と違うと思うので、大阪大学としては「適塾」を頼りに、医学部の新入生に「医のこころ」を伝えるという取組を行っている。

#### Q5 江戸時代の医師はどのような身分だったのか

江戸時代は身分制度が明確にされていて、それを越えることはできないイメージがある。緒方洪庵は武士から医師になったが、医師は4つの身分制度の中のどこにも当てはまらないように思う。医師はどのような身分だったのか。

(木下)

正確には分からないが、門下生の中では武士の出身者の割合が高かったと思う。武士以外でも医師になることはあったと思うが、それは士農工商の身分制度上で何かの身分であったわけではない。武士以外にどのような出身の人が医師になっていたかということとは分からない。

大坂では医師の番付があつて、大坂で開業している医師を相撲の番付のように「前頭」「関脇」「大関」とランク付けして、定期的に発行されていた。緒方洪庵も「前頭」から

段々と上がって「大関」にもなっているが、そのように世の中の人が医師を格付けしていた社会だったようである。

#### Q6 福澤諭吉の独立自尊の志は「適塾」で生まれたのか

「適塾の精神」は「医のこころ」や「利他」「博愛」という言葉で表現できると思うが、「適塾」からは医師ではない福澤諭吉なども輩出されている。福澤諭吉の精神のあり方として独立自尊の志、気概があるが、「適塾」にはそれについての事績があるのか。

(木下)

それは諭吉個人のパーソナリティに依るところが大きいと思う。洪庵は座右の銘である「臨事無為賤丈夫」(事に臨んで賤丈夫となるなかれ)という言葉の色紙を書いて、出て行く者に渡しており、洪庵の思いは「正々堂々と事に当たれ」ということであった。それが独立自尊にどのくらい繋がっているかは分からない。

福澤諭吉は「天ハ人ノ上ニ人ヲ造ラズ 人ノ下ニ人ヲ造ラズ」と言ったように、一人ひとりの人間の価値をよく見ていた人で、それぞれの人が個人として大事だという考え方をはっきりと持っていた人だと思っている。



## 人生は一度。大切に、そして大胆に。

言うまでもなく人生は一度きりです。その人生をいかによく生きるか、どの道に進めば充実した人生が送れるのか誰しも考え、選択に迷うものだと思います。向き不向きはあるでしょう。しかし一方、「継続は力なり」ということがあります。一つの道を選択したら、その道を大切に粘り強く継続することが成功への鍵ではないかと思います。一から始めて努力を続ければ、やがてこの道のことなら自分に任せてくれ、隅々までわかっているよと言えるようになり、自信も得られるでしょう。また、それぞれの道にはそれぞれ奥深さがあり、自身が一定の段階に達するとその道のさらに奥が見えるようになり、さらなるやりがいを感じるはずです。そのようにして人はその道のプロになっていくのだと思います。継続は力なりとはそのようなことを言っているのではないのでしょうか。

どの道を選べば良いのか。難問です。しかし、多くの道にはその道なりの良さ、楽しさがあると聞きます。一つの道にはいくつもの段階があり、それを一つずつ登っていくごとに充実感が得られ、またその道の良さ、楽しさが見えてくるのだと思います。そうであれば、自分が思った道に迷わず大胆に飛び込めば自ずから将来は開けていくのかもしれない。

皆さんは、何を勉強しておけば将来役に立つかを知りたいと思っているかもしれません。私は理系の研究者ですが、国語力と英語力の重要性を強く感じています。研究者の仕事は、実験や観察など研究を行って、それまで知られていなかった事実を発見したり、ある現象が起きる原理を解明したりすることです。しかし、発見によって仕事が終わるのではなく、研究で得た新知見を論文や講演という形で世の中に発表し伝えて、はじめて完結します。発見後の、この過程に国語力と英語力が必要なのです。研究の仕事は国際的で世界中の研究者が同じ土俵上で競っており、共通語は英語です。そのため、自身の知見を英語で正確に表現し伝える力が要求されます。これがうまくできないと、内容が十分に伝わらず、誤解されたり、成果が正しく評価されず埋もれてしまったりします。また、近年の研究は同じ分野の各国の研究者と情報交換をしながら進めることが肝要なのですが、これも英語力そしてその基になる国語力が備わっていないと後手に回ってしまいがちです。このような状況は研究職だけでなく、多くの職種でも同様ではないのでしょうか。グローバル化した今日では、文化や考え方の違いを越えて正確にコミュニケーションを行える準備が、理系・文系を問わず必要だと思います。

2019年2月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所  
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)